河口の空地に曝らす馬草莖の山御用船來て積
み去るならむ

投錨せる互ひの距離の遠くして沖中に霧らふ
數隻の汽船

遠岸は倉庫工場しみ立ち霧らひ背後にひろが
る市街想はしむ

倉庫立て混む尻無川の川口は前を航きながら
知らず過ぎにき

左右の岸にひた打つ鐵の硬きおと耳に徹るも
冬の運河溯る

ぎらぎらとあぶらの浮ぶ工場岸運河の晝の潮
は動かず

くろく動く工場内部の人影を運河航きつつ深
く覗けり

工場に鐵うつ音のひびくなべ運河の岸の冬百
舌のこゑ

工場地つらぬき溯る運河より木津川に出でて
人家の矮き

大阪中の塵芥あつめて焼くけぶり白き煙突よ
り僅に騰る

岸の上に修繕する船大きけれ錆びて赤き艫を
川に向け居り

市街中に二つの川越す鐵道橋青く塗られてお
のおの聳ゆ

川岸の家屋のあひだにはさまりてまぎらはし
もよいま造る船

晝川を駛る艇より覗きたり暗渠とほして向う
にも川

昭和十四年

伊勢參宮

神山ゆ昇る朝日のまばゆきに眼を伏せて渡る
宮路の橋を

この宮に大つごもりのゆふべより焚きし篝火
痕(あと)も殘らず

天照らす神の御國の蒼生にしてここに祈るは
すべて同胞
跪くわれのうしろにゐる人の請ひ禱む言葉泣
けるがごとし

冬の大阪城

冬陽さす大手の坂に北見れば隅櫓載せて反り
し石垣

しつかりと隅櫓載せし石垣は青きお濠にその
根を浸す

城公園の濠端さむき冬日影かへる人のみに遇
ふ時刻なり

空濠の底のひろきにいちめんに冬草青くして
ひた土を見ず

空濠の高石垣にはふ蔦の葉は落ちつくして蔓
ばかり這ふ

石垣の隙間すきまに多く溜り道の落葉は吹き
飛ばされて無し

桝形は巨石と巨石ぎつしり組み落葉のたまる
隙間もあらず

火焔の痕くろき石はおのづから天守閣に近き
ところに多し

本丸を歩きて廣し砂まじりに木の葉吹き飛ば
す強き風あり

本丸を歩きて高し濠岸の矢倉より矢倉へとま
なこを移す

西日さし矢倉矢倉の白壁に陰日向あり本丸歩
む

堅城も常無きものと鬼門除けの獸面石は火に
焼けしかも

師團司令部の窗ことごとく窗掛おろし前の廣
場に夕陽殘らず

司令部の玄關ふかく靴音して薄暮出で來る將
校ひとり

大坂陣斷片

天守閣にて、黒田屏風寫

鎧武者旗馬じるし描き埋めいまだ焼けざる天守峙つ

馬に騎りし寄手の一人がかざせるは城門に咲けると同じ花かも

鎧武者犇めくなかに逃げまどふ女は白く描かれて目立つ

最上屏風寫

夏之陣裸體にて戰へる武者多し鎧著たるはうしろに控ふ

女人のみこもる矢倉の眞下にて裸身の手負ひを裸身が背負ふ

逃げられぬ女人は矢倉に靜かに居て束ねし黑髪肩にさがれり

外濠發掘品

もののふの著たる兜は眉庇も鍬も朽ちて鐵椀の如し

長久手村

名古屋市外長久手村に來にしかば泥炭掘りて冬田を運ぶ

長久手村首狹間といふ所に來て激戰地跡の冬田を歩く

戰ひは午過ぎに終り遺棄屍體を鴉啄くと軍記に讀みし

この田原に夏の夜明けより午過ぎまで戰ひぬきて皆討たれける

旗を伏せて躍き來し敵は側面に背後に現れ萬事終りぬ

おのづから老いし勝入齋組み伏せられ若き長可は彈丸に殪れき

同じく松を植ゑし二つの首塚は冬田の道路隔てて對ふ

刈田原の丘の上にして松蔭の首塚の石午陽あたらず

岩作村長久手村と冬田歩き首塚ばかり今日は弔ふ

古戰場に通りがかりの寺を訪へば大根干して冬籠るらし

厚朴の葉敷き勝入齋の首級据ゑて實檢したる猪腰原か

もののふの勝入齋が首の血によごれし厚朴の葉捨てられにけむ

首實檢終りて總軍聲あはせ勝てりや勝てりと十度唱へし

一撃加へさつさと此處を引揚げし家康のいく
さ面白からず

賀名生初夏

丹生谷の賀名生の村は百姓家に牡丹花咲きて
水滾つなり

牡丹咲くこの家の四面は丹生川の小峽の若葉
蒸すが如しも

百姓家の牡丹の花に佇つ妻を賀名生行宮阯へ
促しにける

賀名生行宮阯、丹生川左岸の山上に在り

二十年の行宮どころ此處かもよ谿谷の狹隘さ
はわれを泣かしむ

この狹き谿谷にいまして畏きや吉野の朝廷衰
へたまふ

衰へし吉野の朝廷さりともと堪へていましき
ここの峽閉に

吉野山も哀しかれども賀名生には參り拜まむ
御陵もなく

皇居阯と傳ふる堀邸を訪ふ

延元の堀孫太郎裔ありてその家守りぬ懸崖の
上の家

和田部落に泊る

日が闌けて十津川街道來し荷馬車はこの家の
前に石南木おろす

この古き街道は熊野本宮まで嶮崖多からし石
南木が咲き

十津川街道の牛馬の往來ながめ居り家を離れ
てゆたけきか妻は

大和賀名生若葉に在る陽なほ明し宿屋をとり
て和にし居るも

翌朝丹生川の渓にて

雑木々の光葉のなかゆ咲き垂らし谷水にとど
く藤の花多し

雑木々の若葉と水の照り交ひに藤さへ咲ける
溪の一隈

若葉溪の朝の陽ざしの冷たくて蜂も虻もねぬ
藤の垂り花

朝山風若葉ひるがへす時の閒し樹ごもりに咲
ける藤の花も見ゆ

向賀名生といふ處あり

この岸の桑の芽吹きもけしき立ち向賀名生は
青し麥畑

更に峽谷を遡りて

吉野山を棄てて來ましし行幸路はこの徑かも
よ寒き瀨のこゑ

いにしへの忍びの行幸畏れ多し人も馬も疲れ
この谿谷の徑を

長篠古戰場

長篠のいくさの日にもこの部落は夏蠶養ひに
けむ今日のごとくに

甲斐の諸將水さかづきに汲みたりし清水と聞
くを螺螺這ふなり

寒狭川をわたりて廣き穂麥原決戰の跡に踏み入らむとす

相變らず鎗刀にて勝つものと彈丸へ飛び込みし甲斐の勢はや

智略乏しく滅びし者の跡に佇てり汗拭きながら憤ろしも

伊那大河原城阯

親王を護り香坂高宗ここに據りき懸崖下にして荒き瀨のこゑ

荒々しき灘聲なるかもこの川し天龍川へ奔りて注ぐ

うべしこそ此處には城築け天龍川を越えて攻め入る道なかりけり

ますらをや此處に楯籠り仰ぎけむ赤石嶽に光る雪あり

楯籠る城のつはものかくのごと麥刈りけむや今も麥畑

まめまめしく親王に仕へしますらをの香坂高宗終りを知らず

鹿兒島市　肇國聖蹟巡拜歌一

今日を來て一箇月前に櫻島が灰降らせたる街に宿りぬ

ものの生りゆたけき國に來しかもよ宿屋の庭の朱欒を見れば

櫻島の南岳より昇る日が七時頃にて硝子を透す

百貨店にひるめし食ひて歸る街に彈痕殘る石垣は見き

むざむざと墓並ぶもよ城山に惜しき丈夫をこだ殺しき

田原坂にて殪ると彫りし墓もあれどほとんど皆は城山に死す

墓石ごとに彫れるを讀めば九月廿四日最後のいくさに死せしが多し

並ぶ墓七百餘基の中央の南洲先生も老いずして死にき

尙古集成館にて島津豐久の具足を觀る、關原に戰死の際著用せしものと傳ふ

關ヶ原の退きくち無下に强かりし島津勢想ひ鎧に對ふ

古き鎧に眼凝らして心寒し鎗が突きたる痕覓めむとす

笠狹之碕　肇國聖蹟巡拜歌二

薩摩國川邊郡笠砂村にて

神さびし笠沙之御前に吾が佇てば夕日の火照る時は來向ふ

この海の火照る夕日は天なるや高千穗の宮の神も觀ましき

天孫のここに來ましし古事を村の人らと一夜かたらふ

遠くにて曉鷄鳴けばやがてこの笠狹之碕の村にも鳴きぬ

あかときと鷄高鳴けり磯崎の潮騷のなかにまぎれずきこゆ

にはつどり遠鳴く聽きてここよりもさびしき部落を吾が想ひ居り

阿多の海の笠狭みさきはいにしへを今の現に
朝日直刺す

冬知らぬ薩摩野菊の咲くところ神代の蹟の磯
におりたつ

隼人の薩摩漁師ら榜ぎ出でて釣りあぐる鰤は
ここからも見ゆ

この海に釣し網して神々のいにしへのごと人
は生きけり

いにしへも今もあらざり阿多の海の黒潮の上
に釣する見れば

通りすぐる薩摩のはての漁村より兵が發つか
よわれも送らむ

冬陽に佇ち兵を送るはこの漁村の女子供のす
べてにて有らし

皇紀二千六百年をまのあたりにこの村の兵も
征きて戰ふ

古きあとを覓め來しわれの眼に觸れて今日の
いくさに人は戰ふ

✓戰ふは海隣にしあれど隼人の薩摩のはての部
落もおちつかず

隼人の薩摩男子が海越えて征きしは歴史に幾
たびならむ

天なるや高千穂の宮の神々も戰ひて國を肇め
たまひき

まつろはぬ民を和爲と鹿兒矢もち神の戰ひし
古國ここは

いにしへゆ今に變らぬ戰爭して國は興るもの
と思ひきはめむ

南薩諸港　肇國聖蹟巡拜歌三

鰹船を久志の浦にて一つ見しが坊之津もまた
一つ居るのみ

坊之津も久志も泊もこの國の古き港は似てを
おもしろ

火山島を沖合にしてこの磯の松原の松あかるく青し

枕崎にて

半島の峠下りしかば青々しく稲孫の伸びし冬田圃なる

耳取峠の海門岳は觀たるかと漁業組合長先づ問ひしかも

漁業組合の二階に掲けし油畫は何年前のこの港かも

この漁港は鰹船の著く季節過ぎ太平洋にただ眞向へり

長崎鼻にて

今落つる海の夕日に吾が妻は笠狹之碕の昨戀
ふらしも

再びは見ざらむ海と吾が妻は夕陽のあたる岩
よ下り來ず

某地にて

防砂林は茱萸の叢多しつぶつぶに實を持ちて
砂に埋もれむとす

十二月薩摩半島の磯山にてすみれの花に妻は
眼ざとし

ここにありし防空監視所移されて更に高き向
うの岬山に立つ

鹿兒島神宮　肇國聖蹟巡拜歌四

鹿兒島神宮に詣づ

天津日高彦火火出見の神宮は巨樟の葉に冬陽
きららか

この神が往き還らしし南の常世ものなる樟は
茂らふ

拜殿の朱塗板床つややかに禰宜が立居の影ぞ
うつろふ

彦火火出見神のみことの間近さに玉串を持つ
吾が手顫ひぬ

高千穂宮阯にて

橿原の大きみかどのおほちちの神のみことが
ここにいましき

高千穂の宮阯にして朝の日闌け鋤きかへされ
し冬田あたたか

豐葦原瑞穂之國のはじめての稻が稔りしその
田原かも

高千穂の大宮あとの刈小田を牛曳き歸る今の
世の民

高千穂の宮阯に來ししるしにと吾が老妻は樟の實ひろふ

高屋山上陵を遙拜す

彦火火出見神のみことの現し身を斂めし山は近づき難し

霧島山肇國聖蹟巡拜歌五

霧島神宮に向ふ途上にて

大演習に今上陛下御野立の獅子之尾といふ丘高からず

獅子之尾は丘高からねいにしへの襲の國の山
も海も見殘さず

御野立所の標石に冬の朝日照り獅子之尾の丘
は生ふる木もなし

大隅の吾平の山のみささぎは出水に荒れて道
なしと聞きぬ

吾が行かぬ大隅半島の岬々はつばらに晴れて
冬の海に向ふ

天降川にわたせる見れば青竹のてすり清けき
かりそめの橋

神苑の大木の杉になまなましく飛生鼠が掻き
し爪の痕あり

社務所にて昨日の新聞を借りて讀めば芬蘭土
の兵なほ善戰す

海の内外世界のことの推移わすれむと思ふ旅
ならなくに

吾が旅の短き間にも幾人か御影町より兵發ち
ぬらむ

霧島の神に詣でつ社務所にも溫泉引くと聞く
はゆたけし

霧島林田溫泉へと登る

霧島を冬山登れりあたたかに南に海の湛ふる
覺ゆ

谷隔て霧島種馬所の丘原見ゆ馬の見えざるは
かなり遠きか

ひろびろと見おろす裾野は海に盡きて薩摩大
隅國ざかひ無し

山のいで湯種馬所の人も浸りゐてさもつばら
かに馬のこと話す

山のいで湯日曜といふに人すくなし苦しき歳
の暮を近みか

翌朝高千穂峰を攀ぢて霧島古宮阯に賽す

高千穂の嚴の神岳吾が妻も足は萎ゆとも攀ぢ
むとぞ言ふ

この國に生まれて老いしみ民われら朝霜ふみ
て高千穂を攀づ

神岳の密林帶を登りはじめ急にひそけしこと
ろ慄く

密林帶盡きむとしつつ登り道は蘚苔のしろく
蒸せる岩溪に沿ふ

青雲に峙つ嚴し峰仰ぐとき神の天降りしこと
疑はず

高千穂は神岳ながら近づけば熔岩の赭き斜面
し見ゆも

霧島の古宮あとは山たかみ磊々として燒石まろぶ

霧島の古宮あとに今据うる巨きなる石を赤牛運ぶ

石原に石の祕室木建てむとす神天降りにしその阯どころ

皇孫の天降りましける巖の禰呂あまり間近に立てらく寒し

高千穗の天の河原に小屋掛けて石工起臥すその石原に

祕室木の石据ゑて居り年の内に工事終へむといそしむらしも

現し身は寒くしあれば高千穂の峰の上の小屋に火を焚きて寄る

焚火に寄り縣廳技師はこの工事の働き甲斐をしみじみと言ふ

われはしも師走旅して山の上に働く人を見つつ寒がる

鵜戸神宮　肇國聖蹟巡拜歌六

岩に架けし宮橋に來て跣足になり踏まむとすもよその橋の上を

神宮は眞下にいますと岩の上を踏みくだりつつ畏かりけり

うちあぐる浪の飛沫の絶間にし神のほこらの
岩窟くぐりつ

遠つ世の襲の國の海の眞冬浪鳴りとよもすも
神の岩窟に

この宮は大き岩窟の岩屋根のかぶさる低し千
木觸れむとす

生れましし遠世ながらにこの神は蒼海原の浪
を觀たまふ

宮の上への速日之峰はみささぎと言ひも傳へて
人に踏ましめず

現しくも或はいまさむ老樫のくらき茂りを目
守りて畏る

西都原古墳群　肇國聖蹟巡拜歌七

朝間ゆく道の長手の霜みれば日向の國も冬さびにけり

霜ふかき畷駛りて村鍛冶の鞴の火をぞ一目見にける

日向なる都萬に吾が來て古墳の隍を歩むと霜ばしら踏む

冬山田歩きて寒し神陵と人の言ふままに默りて對ふ

瓊瓊杵尊の大みささぎと村人の顔にあらはれて疑はず言ふ

高千穂を昨日は攀ぢて今日の日は神の御陵(みはか)に
遇へらくたふとさ

この山より船の埴輪が掘り出され神の渡りし
海想はしむ

日向なる都萬の古町はいつまでも想ひ出づべ
し埴輪を買ひぬ

宮崎神宮　肇國聖蹟巡拜歌八

參向(まむか)ふ宮路の眞砂朝日照りおごそかにして眼
に寒からず

高知るや千木に朝の日きらめきて第一代の天
皇まします

神代の宮々巡り終りてここに來れば我等に近
し畏かれども

東に國さだめむとみいくさを率て征きましき
五十歳に近く

吉備浪速熊野吉野とみいくさ征きまつろはぬ
者は撃ちてしやみぬ

美々津懐古　肇國聖蹟巡拜歌九

大御船彼の間より榜ぎ出でぬと今に傳ふる沖
の岩二つ

東に國覓ぎたまふすめらぎの御船の跡の水尾
光りけむ

大御船榜ぎ出づるなべにこの濱に哭きいさち
けむ老と稚きと

いかさまに越えましけめかここにして速吸之
迫門は雲居はろけし

神日本磐余彦尊この浦ゆ出で征きましてあと
の空國

從此出でし大御いくさは神代にて釣舟泛ける
今日のひそけさ

國興る御代にし遇ひて日向路は詣る人多し今
までは田舍

卷末小記

最近四箇年の拙吟五百九十一首が此の歌集に收められてゐる。實業界引退に始まり愛妻和子病歿に終る此の四箇年は、予の生涯中最も深く記憶せらるべき期間であるに相違ない。住友を辭すると同時に、作歌欲は堤を破つた池水の如く迸出した。和子と一緒に十餘回の旅行を試み、山海の間に全く自由の生活を樂しんだ。さうして、昨年十二月肇國聖蹟の巡拜をも共にし、歸宅後二週間目に和子は突然發病して殪れてしまつた。その時彼女五十三歳、予五十八歳。

讀者の便宜のために、自己解說することを許していただき度い。この歌集は、形式から觀

ると群作が主要部分を占め、群作の構成分子として往々連作を介在せしめてゐる。「立山行」「北支行」「兩羽行」「南九州行」「那須岳と朝日嶽」「北九州行」「肇國聖蹟巡拜歌」等の諸篇はいづれも群作と稱すべきもので、それらの中に含まれたる「いたや峠越」「鷲」「白塔山に登りて」「萬里長城」「鴨」「元寇防壘阯」「笠砂村偶成」「霧島古宮阯」「西都原古墳群」「美々津懷古」などは連作と稱すべきものであらう。

次に内容を檢すると、四種に分つことが出來る。第一類は「立山行」「北支行」「兩羽行」「南九州行」「東北と北海道」「西湖雨後」「那須岳と朝日嶽」「鹽原山晩秋」「北九州行」などの旅行歌で、主として自然を對象としたもの。第二類は、支那事變勃發の劈頭に發表した「炎夏動員」をはじめ、「長期戰覺悟」「武漢進擊」「銃後私帖」「伊勢參宮」等、刻下の時局に關し感懷を吐露したもの。第三類は、「肇國聖蹟巡拜歌」「元寇防壘阯」「賀名生初夏」「伊那大河原城阯」「井伊谷詣」「長篠古戰場」「長久手村」「名護屋城阯」「大坂陣斷片」等、日本歴史を回顧して、或は憧憬し、或は悲憤し、或は時として批判を試みたもの。第四類としては身邊雜唱其他の作「辭職の後」「皇太子殿下」「澁谷の家」「炎夏朝夕」「北白川の家」「都會の冬」「冬の大阪城」などを擧げ得る。

予は歌歴いたづらに長く、歩みの遲々たること牛の如しだ。これを立山登攀に比すれば、汽車に搖られて富山驛に著き、輕便鐵道に乘替へ、それを降りて常願寺川の岸に出で、稱名川の谷を遡り、八郎坂に喘ぎ、彌陀高原をてくてく歩いて、やつと室堂の小屋まで辿り著いたが、其處までに四十年を費してしまつた。或は猶未だ室堂まで來てゐないのかも知れない。ともかく、これからが一倍困難だ。行く手に主峰が屹立してゐる。果して最後の岩場を攀ぢ得る乎。いにしへの歌人らに手を引かれ、現代の詞友らに腰を押していただいてと思ふが、結局は自分の根氣と脚力との問題だ。

爲念附記するが、立山登攀及び北支那旅行は共に昭和十年の事であつたけれども、それらを詠じた歌の出來たのは翌十一年になつてからであつた。歌因の出來事と歌の制作との間に年月を隔てることは、予の經驗上めづらしくない。

昭和十五年五月　於山海居

川田順

歌集鷲

昭和十五年六月十日印刷
昭和十五年六月十五日發行

著者　川田順

定價　壹圓參拾錢

發行者　大阪市西區靱上通一丁目三一　矢部良策

印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四　井下精一郎

版元　東京市四谷區愛住町十九　大阪市西區靱上通一丁目　株式會社　創元社
振替東京一五六五番　電話四谷八三八一番
振替大阪五七〇九九番　電話土佐堀三一八六番

見本　創元社

創元選書の刊行について

良書は永遠の若さに輝き、萬人に必讀さるることを深く欲する。如何なる新しきものよりも常に新しく、あらゆる文化の源泉となつて盡くることを知らない。良書の普及こそは身を出版にささげる者の片時も忘るることを得ない責務である。吾人は絶えずその點に留意し、あくまで公明なる手段と眞摯なる努力を以て、躍進日本の要望に副ひ、且出版事業の眞使命に悖らざらんことを念願として來た。

如上の微意に基づき吾人は茲に『創元選書』を刊行せんとする。收むる所は眞に萬人の血となり肉となるべきあらゆる種類の良書であるが、これが選擇には獨自の立場から愼重なる檢討を重ね、有名無名たるを問はず、專らその本質的價値にのみよる可きことを主眼としたものである。しかも體裁の典雅、印刷の鮮明、製本の堅牢、價格の低下等に細心の注意をはらひ、飽くまでも世の讀書子の共有たらんことを期した。吾人は本選書が微力ながらも國民の教養を高め、正しき批判的精神と良心的行動との良き指針の一助ともなり、將來日本の文化建設の礎石とならんことを切望して歇まぬ。

昭和十三年十二月

創元選書既刊目錄

柳田國男著　昔話と文學　（1）　定價一圓二十錢　送料十錢

本邦民俗學の泰斗たる柳田先生が、昔話と文學との間の未決着な諸問題を、驚くべき豐富な資料から究明し、わが民族の過去に於ける精神生活を明瞭にすると共に言語藝術としての文學の將來をも暗示されたもの。

野上豐一郎著　世阿彌元淸　（2）　定價一圓　送料十錢

世阿彌の組織立てた藝術理論は日本の全ての藝術表現の原理として現代でも普遍的と認められる。世阿彌を多年研鑽せる野上氏の本書は、現在に於ける最も信憑すべき世阿彌傳であり、中世文化の一側面史である。

宇野浩二著　ゴオゴリ　（3）　定價一圓二十錢　送料十錢

宇野氏は多年ゴオゴリに私淑し、日本のゴオゴリと言はれ、その抒情的才能と諷刺的才能とはゴオゴリを彷彿させる。氏は不幸な一生を送つたゴオゴリの人とその作品に就いて、前人未踏の傳記文學を打ち樹てた。

横光利一著　家族會議　（4）　定價一圓五十錢　送料十錢

東京と大阪との商人氣質、習慣、家法などの對立を緯とし、男女人物の道義と愛情との衝突を經とした横光氏が苦心の小說であつて、恰も近松の世話物にも匹敵する構想の妙と文藻の美を心ゆくまで發揮せる名篇。

小林秀雄著　文學　（5）　定價一圓　送料十錢

批評家とは言へ小林氏は現代のどの作家よりも作家らしい活動をしてゐる。世の俗論に對して痛烈な批評を加へた本書は、現代日本の誠實な良心に與へる貴重な警告であり、新文化創造のためのよき糧であらう。

思想の遍歴 (6) 定價一圓二十錢 送料十錢

ハクスレイ著 西村孝次譯

現代英國作家のうち最も鋭い對社會的な感覺をもつてその行詰りと頽廢を感じてゐるハクスレイが、知性、理想、歴史、音樂、風俗、社會理論、教育、經濟、心理、政治、倫理に就てもらした小論隨想を集む。

音樂と文化 (7) 定價一圓二十錢 送料十錢

河上徹太郎著

河上氏はわが樂壇の致命的な缺陷を指摘し、良識の必要を極力主張して歇まない。文學と音樂との兩種の教養をもつた一人格の、この個性的な情熱は一般人の文化的自覺に多大なる影響を與るへであらう。

春琴抄 (8) 定價七十五錢 送料十錢

谷崎潤一郎著

谷崎氏が齡漸く老境に入ると共に作風一轉期を劃し、すぐれた物語的主題と肉感的現實を含んだ傑作を續々と世に示した。「春琴抄」はその期に於ける氏の最大傑作である。氏の文章は讀者を陶醉させるであらう。

チェーホフの手帖 (9) 定價一圓 送料十錢

チェーホフ著 神西清譯

本書にはチェーホフの隨感、作品の腹案、スケッチ、心覺え、を書きとめた私錄と、彼の興味ある日記とを抄錄す。發表を夢にも豫想しないものだけに却て作家チェホーフの秘密の匂ひが高く且つ純粹である。

チェーホフへの書簡 (10) 定價一圓二十錢 送料十錢

フロオベル著 ジョルジュ・サンド 中村光夫譯

巨匠フロオベルが、閨秀作家ジョルジュ・サンドに宛てた書簡を纏めて一卷としたものである。實生活に訣別し、作品の上で「自己」を生かしたフロオベルの文學觀、人生觀、戀愛觀が躍如として流れてゐる。

モリエール (11) 定價一圓 送料十錢

辰野隆 本田喜代治共著

批評家ボアロオをして十七世紀最高の詩人と讃嘆せしめた大喜劇作者モリエールの全貌が、辰野教授と本田氏の協力によつて茲に餘蘊なく描き出された。フランス文學愛好家は勿論一般讀書人が座右の書である。

東洋の理想 (12) 定價一圓 送料十錢

岡倉天心著 淺野晃譯

この書は美術史といふよりも寧ろ精神史である。識見の廣大卓拔は東洋美術の粹となつて高らかな理想の歌を聞く思ひがあり、全篇を貫流する浪漫的情熱の高鳴りは、讀者をして思はず感奮せしめるであらう。

春の岬 (13) 定價一圓 送料十錢

三好達治著 詩集

文學の文學ともいふべき近代抒情詩の大道を悠々濶歩してゐる著者の詩境は、何人の追隨をも許さぬ高次のものである。この一卷の詩集は、著者が青春の日のかたみであると共に萬人の心に宿る青春の姿でもある。

スタンダアル (14) 定價八十五錢 送料十錢

アラン著 大岡昇平譯

本書はフランス評論壇の者宿アランが、豫て師と呼んでゐた心理小說の巨匠スタンダアルを、懇切丁寧に興味深く分析した文學的最上級の結晶であり、一大權威書である。眞理を探究して止まぬ彼の面目躍如たり。

木綿以前の事 (15) 定價一圓五十錢 送料十錢

柳田國男著

本書は一代の碩學が廻りくどい論理を排し具體と實證とを以て、有りとあらゆる前代の無名無數の母や、姉妹の身の上が殘りなく見渡し採上げられてゐると言ふ、俳諧の奥を探つて紅紫とりどりの女性の歴史を闡明しようとしたものである

眞船豐著　見知らぬ人（16）定價一圓二十錢　送料十錢

眞船氏ぐらい强靱な生活力を持ち、それをその作品の上で嘘偽りなく證明して見せてくれる劇作家は尠い。いづれも作品の底には、靜かな妖氣がただよひ、紋切型に陷らず、現代人の中のドラマ性を攫み出した最も底深い感動がある。

堀辰雄著　かげろふの日記（17）定價一圓　送料十錢

「源氏物語」等に深い影響を與へてゐる「蜻蛉日記」の本質的なものを、著者堀氏は今日のわれわれの新しい言葉をもつて生かし、同時に日記作者たる一女性の潑剌たる感情及び心理を完全に描き出した。文壇近時の一大收穫。

ヴァレリイ著　吉田健一譯　精神の政治學（18）定價一圓　送料十錢

ヴァレリイの不朽の名著『ヴァリエテ3』の中から、「精神の政治學」「知性について」「地中海の感興」「レオナルドと哲學者達」を譯出した。現代ヨーロッパ精神の解説書として、萬人の必讀を要請してやまない。

チェーホフ著　湯淺芳子譯　妻への手紙（19）定價一圓二十錢　送料十錢

本書は、チェーホフの興深い私的生活や、演劇への示唆を含み、また彼が如何に人間の價値才能を高く評價し、それを生かす爲に如何に自身の不自由や苦痛を堪へた人であつたかを敎へる。彼の文學を愛し研究する人にとつて最適の書だ。

佐藤信衛著　冬の一夜（20）定價一圓二十錢　送料十錢

この對話體をもつて書きつづられた一卷には、若い科學者と小說家とが登場して、自然、道德、人生、社會、宇宙等々に關する諸問題を忌憚なく討究し、人性を正し、恒久普遍なるリアリテを求めようとする。現代人必讀の書。

創元選書既刊目錄

岸田國士著　歲月（21）定價一圓　送料十錢

フランス近代劇の精髓を優れた個性をもつて移植し、我國演劇界に純正演劇の地歩と傳統を樹立した輝かしい名作「紙風船」「牛山ホテル」「歲月」の三篇を收めた傑作集。他の戲曲は自ら抹殺してもよいとさへ云はれる代表作集である。

山上八郎著　日本の甲冑（22）定價一圓四十錢　送料十錢

學士院賞を獲たる「日本甲冑の新研究」の中から、著者自ら萬人の興味をそそるべき箇所を拔萃し、その後の研究の成果を加へて首尾一貫せる小册に纏め、以て原著の精髓を傳へた貴重な文獻。名實共に斯界第一の書である。

ドラクロア著　植村鷹千代譯　藝術論（23）定價一圓二十錢　送料十錢

ユーゼーヌ・ドラクロアは、フランス大革命の精神を體得した「新しい人間」の典型であり、フランス繪畫に於ける天才的表現者であつた。眞實の美の意識に透徹した巨匠のこの藝術論こそ、近代文化史上に燦然たる光を放つ無二の名著。

萩原朔太郎著　詩集　宿命（24）定價一圓四十錢　送料十錢

宿命は「散文詩」と「抒情詩」と書下しの「附錄」＝散文詩自註＝の三部を合編したもので、著者の至純な藝境の高次なもののみが點綴してある。この書は、著者を知る上にも又その詩情にふれるにも又とない好書である。

柳田國男著　國語の將來（25）定價一圓五十錢　送料十錢

日本語を愛する者なら誰でも、それに對して樣々な疑問や興味や危惧を抱かずにはゐまい。氏は高い敎養と傑れた見地から、時代環境の變化に應じ、より立派に、より健全に發達し得るよう、これが眞の愛護を說きその將來を豫測された。

谷崎潤一郎著　吉野葛（26）

定價一圓　送料十錢

「吉野葛」は南朝の秘史と傳説とにかくれた奥吉野の神祕境を探つて、大谷崎が情感濃かな上方人の感傷を描いた名作。「盲目物語」は戰國亂世の裡に咲く佳人の哀話、和文の正統を踏んだ大文章として名聲嘖々の傑作である。

川田順著　西行（27）

定價一圓三十錢　送料十錢

和歌と宗教との間を彷徨しつゝ、矛盾撞着に苦惱のかぎりを盡した西行の歌は所詮その苦しみから來る眞摯な告白である。多年ひたむきな研鑽を積まれた著者が、在來の誤傳異説を糺し、爰に前人未踏の西行觀を打ち立てられた。

竹内尉著　千利休（28）

定價一圓　送料十錢

日本精神文化に不滅の光彩を放つ利休の茶は芭蕉の俳句、宗祇の連歌、西行の和歌、雪舟の繪畫と根本精神を一にするものである。本書は悲劇的な生活を閉ぢた利休の傳記としてその精神を知る恰好の書である。

ニイチエ著　阿部六郎譯　惡意の知慧（29）

定價一圓　送料十錢

本書は「悅ばしき知識補遺」「惡意の知慧」を譯出して一卷としたものである。この輕やかな斷片は、彼が所謂實證主義的傾向から獨自の悲劇的思想に成熟して行く時期の所産で、悲痛な人生眞理の汲みつくせぬ魅惑を啓示してゐる。

シエストフ著　阿部・河上譯　悲劇の哲學（30）

定價一圓二十錢　送料十錢

ドストエフスキー論とニイチエ論からなる人性探究の書である。近代の尨大な社會や文學の體系をなす實證主義的合理主義への反逆から、爰に眞實を見出す彼の論旨に或は狂暴さを感ずるも、その心情の清純には打たれずには居られぬ。

創元選書既刊目錄

井伏鱒二著　川と谷間（31）

定價一圓　送料十錢

「川」及び「谷間」は特殊の色調を持つ井伏氏が獨特の土俗趣味の上になせる美しき田園風物誌である。高き牧歌的情調に溢るゝ佳品として自他共に許さるゝもの。收むる所の他の二篇は何れもその頃の、作者自ら懷しとするものである。

モーリス・ス石川欣一譯著　日本その日〳〵（32）

定價一圓四十錢　送料十錢

本邦生物學、人類學の鼻祖たる博士が北は北海道から南は九州に至る採集旅行の折々に綴れる日本紀行として興味津々。半世紀前の我が風俗習慣が能く科學者の炯眼によつて觀察され、歷史學上、民俗學上貴重の資料でもある。

梶井基次郎著　城のある町にて（33）

定價一圓二十錢　送料十錢

若くして逝ける梶井氏の珠玉「檸檬」「城のある町にて」等集めて十九篇、文章は重厚で且つ精確、描寫は丹念で且つ簡潔、詩的な心情と冷徹な批判力を備ふ作家的天分は既に最初の出發當時から完成しきつた姿をとつてゐる。

ヴァレリイ著　小林秀雄譯　テスト氏（34）

定價一圓五十錢　送料十錢

「テスト氏との一夜」は一八九六年に發表されたもので、ヴァレリイの青年期の理想或は飢渴の大膽な又極めて個性ある表現である。彼の方法は、言はゞ、倫理的で既に力一杯に語られてゐる。爰に譯出された「テスト氏との一夜」以外の文「友の手紙」「エミリイ・テスト夫人の手紙」「テスト氏の航海日記」「序文」は皆後年の作であるが、併しすべて「テスト氏との一夜」と云ふ主題の變調である。

ヴイレ著 關根秀雄譯 **自然哲學** (35) 定價一圓 送料十錢

モンテーニュの

内容 第一部モンテーニュ概説十一篇。第二部モンテーニュの自然哲學。第一章モンテーニュの一生の中の幾つかの日附、ストワ主義の時代、自然哲學時代へ、その他。第二章モンテーニュの眞の相貌その他。

谷崎潤一郎著 **陰翳禮讃** (36) 定價一圓二十錢 送料十錢

谷崎氏の圓熟せる藝術的心境を物語る名隨筆「陰翳禮讃」「懶惰の説」「戀愛及び色情」「厠のいろ〳〵」「旅のいろ〳〵」等東洋的な思想に輝く名隨筆集。

志賀勝著 **ロレンス** (37) 定價一圓二十錢 送料十錢

人間を理性の袋小路から解放して全的な生命の姿に見ようとするロレンス。あの素朴强健な藝術を分泌する姿のまゝの彼の存在を、主として直接彼に交り共に生活した人々の回想にたより綴られたのが本書である。

柳田國男著 **孤猿隨筆** (38) 定價一圓二十錢 送料十錢

猿の皮、松島の狐、狐飛脚の説その他の隨筆が收められ、文書が聊かも傳へようとしなかつた生活にも時代の變遷はあつて、之を知る途が日本民俗學の出發點でもある。本書は獸と人間との歴史を獨自の方法で尋ねた好著である。

創元選書既刊目録

バルザック著 宮崎嶺雄譯 **谷間の百合** (39) 定價一圓五十錢 送料十錢

(上卷) 情念の本質的なもののみを美事に拔出して、最も美しく青春をあらはした戀愛小説である。その誠實と情熱とに一貫された内容は、バルザックの數多い作品中、獨自の位置を占めるものである事は論を俟たない。

三宅周太郎著 **文樂の研究** (40) 定價一圓五十錢 送料十錢

世に藝道の數は多いが、人形淨瑠璃程深刻で、且つ興味深いものはあるまい。嚴正な型を持ち、しかも苛烈な精道修業を積む藝術——この峻嚴華麗な國粹藝術の殿堂を、隈なく研鑽した文獻が本書である。

柳田國男著 **雪國の春** (41) 定價一圓四十錢 送料十錢

本書は著者の信越奥羽の長い旅の收穫と言ふべく、記錄なき鄕土の一つの記錄として後々にまで遺るべき名著である。内容——雪國の春、北の野の綠、草木と海と、豆手帖から、雪中隨筆、をかさべり、淸光舘哀史其他。

柳田國男著 **秋風帖** (42) 定價一圓 送料十錢

「雪國の春」「海南小記」と共に著名な三部作の一。駿州燒津を振出しに岡崎を經、美濃柿野から木曾川を渡り、桑名から紀伊へ拔け、淡路、瀨戸内海を廻つた旅行記である。本書は中部日本の鄕土研究の光輝ある記念塔である。

創元選書既刊目錄

柳田國男著　**海南小記**（43）　定價一圓四十錢　送料十錢

著者は新しい民族學の立場から、南日本の大小遠近の島々に普遍してゐる生活の理法を尋ね、この貴重な一卷をあらはした。日本民族の過去の生活や文化を知らんとする者にとつて無二の好著である。

近刊豫告

齋藤茂吉　正岡子規　三好達治　陶淵明

田中茂雄　魚の話　鳥羽正雄　日本の城

佐藤春夫　上田秋成　片山敏彦　リルケ　ロダン

石濱純太郎　富永沖基　谷川徹三　ニイチェ

沼田頼輔　紋章の話　齋藤隆三　日本近世世相史

798
102